

### 歴史点描 34 「備忘録」にみえる日露戦争 その3

明治38年9月、日露戦争は終わりました。「備忘録」からは、明治38年11月14日「後備五十八連隊解体に付池田浅吉帰郷、宮田まで迎えに行」、11月26日「黒田平治・水田春雄君凱旋帰宅に付駅まで行く」など、12月4日、10日、21日、明治39年2月7日、11日、13日、15日、16日、3月25日、27日で計16人の凱旋帰郷が確認できます。

そんな中、明治39年4月16日、「各部落総代町役場集会、凱旋祝賀会開催に付種々協議」します。その結果、22日正午より龍門寺で祝賀会が行われること、雨天の場合は順延すること、賛成者は会費一人金50銭、模擬店で物品を販売することが決まりました。その後も協議を重ね、22日を迎えました。

「22日曇天ではあるけれども、執行することに決定」し、凱旋祝賀会が行われました。饅頭店他、関東煮、煮附、煮玉子、みかん、寿し、八幡巻、酒の模擬店が並びました。呉服店や雑貨店寄贈のこぶまき、燐寸会社寄贈の善哉のほか、製塩商より茶店の催しもありました。また、凱旋兵士には、蒲鉾、手拭、アンパン、みかん、巻煙草の寄贈もありました。しかし、12時ごろより降雨。「備忘録」の著者は、「実に残念」と書いています。

午後1時頃から本堂で式が行われました。第一音楽隊吹奏、第二中円尾町長開会の辞、第三合田助役平和の詔勅朗読、第四奥本君軍人へ詔勅朗読、第五野村君在郷軍人総代答辞、第六来賓の祝辞はなく、第七君が代楽団吹奏三唱、第八町長万歳三唱、第九町長一般へ挨拶と続き、宴に移りました。宴の参加者は300名以上、余興として、二〇加(にわか狂言)もありました。著者は、「未曾有の盛会、もし、晴天であったら非常の雑踏ではあったであろうが、生憎雨天のため、一同遺憾」と記しています。

一方で、日露戦争における死者は、「備忘録」からは興浜だけでも8人確認できます。日本軍全体の戦死者は8万1455人に達し、その内戦闘死は6万31人にのぼります。日清戦争とは桁違いの規模(『姫路市史』第5巻上 本編)でした。「凱旋祝賀会」は、戦争の非情な本質を覆い隠す役割も果たしたのではないのでしょうか。「備忘録」から地域の庶民の出来事、暮らしを読み取り、そこから歴史を考えていきたいと思えます。

網干歴史講座会員 垣内 小林淳子



「凱旋祝賀会」のものと思われる写真  
写真提供 植田実加子氏